

1 嘆 徳 文

夫れ、親鸞聖人は、淨教西方の先達、真宗末代の明師なり。博覧内外に涉り、修練頭密を兼ね。初めには俗典を習いて切磋す。此れは是れ、²伯父業吏部の学窓に在りて、聚螢映雪の苦節を抽いずる所なり。後には円宗に携わりて研精す。此れは是れ、貫首鎮和尚（慈円）の禪房に陪りて、大才諸徳の講敷を聞く所なり。之に依りて、十乘三諦の月、観念の秋を送り、百界千如の花、薫修歳を累ぬ。爰に情つら出要を窺いて、是の思惟を作さく、「定水を凝らすと雖も識浪頻りに動き、心月を観ずと雖も妄雲猶覆う。而るに一息追がざれば千載に長く往く、何ぞ浮生の交衆を貪りて、徒に仮名の修学に疲れん。須く勢力を抛てて直ちに分離を憐うべし」と。然れども、機教相應、凡慮明らめ難く、迺ち近くは根本中堂の本尊に対し、遠くは枝末諸方の靈崛に詣でて、解脱の徑路を祈り、真実の知識を求む。特に歩を六角の精舎に運びて、百日の懇念を底す処に、親³告を五更の孤枕に得て、数行の感涙に咽ぶ間、幸いに黒谷聖人（法然）吉水の禪室に臻りて、始めて弥陀覚王浄土の秘局に入りたまひしより爾降、三経の冲微、五祖の奥贖、一流の宗旨相伝誤つこと無く、二門の教相稟承、⁴由有り。是を以ちて仰ぐ所は⁵「即得往生 住不退転」（大経）の誠説、宛も平生業成の安心に住し、憑む所は⁶「歡喜踊躍 乃至一念」（同）の流通、此れ乃ち無

上大利の勝徳なり。仍^よつて自修^{じしゆ}の去行^{こぎやう}を以て、兼ねて化他^{けた}の要術^{ようじゆつ}とす。時に尊卑^{そんび}多く礼敬^{らいきやう}の頭^{こつべ}を傾^{かたぶ}け、緇素^{しそ}挙^{きよ}りて崇重^{そうじゆう}の志^{こころざし}を齊^{ひと}しくす。

就中^{なかんずく}に一代藏^{いちだいざう}を披^{ひら}いて經・律・論・釈^{きやうりつろんしやく}の簡要^{かんよう}を擢^{ぬき}いでて、六卷^{ろつかん}の鈔^{しやう}を記^きして『教行信証^{きやうぎやうしんしやう}之文類^{もんるい}』と号^{ごう}す。彼の書^かに據^のぶる所^{ところ}、義理^{ぎり}甚深^{じんじん}なり。謂^いわゆる、凡夫^{ぼんぶ}有漏^{うろう}の諸善^{しよぜん}、願力^{がんりき}成就^{じゆうじゆ}の報土^{ほうど}に入^いらざることを決^{けつ}し、如来^{にやらいりた}利他^{しんじん}の真心^{あんにようしやうみやう}、安養^{あんやう}勝妙^{しょうみやう}の樂邦^{らくほう}に生^{しやう}ぜしむることを呈^{あらわ}し、殊^{こと}に仏智^{ぶつちしん}信疑^ぎの得失^{とくしつ}を明^あかし、淨土^{じやうど}報化^{ほうけ}の往生^{おうじやう}を感^{かん}ずることを判^{はん}ず。兼ねては復^{また}た摂瑛法師^{ちやくえいほうし}の釈義^{しやくぎ}に就^ついて、横堅^{おうじん}二出^{にしゆつ}の名^なを摸^ほすと雖^{いえど}も、宗家大師^{しゆうけだいし}（善導^{ぜんどう}）の祖意^{そい}を探^{さぐ}りて、巧^{たく}みに横堅^{おうじん}二超^{にちやう}の差^{しや}を立^たつ。彼^ひ此^し助成^{じよじやう}して權実^{ごんじつ}の教旨^{きやうし}を標^{ひやう}し、漸頓^{ぜんとん}分別^{ぶんべつ}して長短^{じやうたん}の修行^{しゆぎやう}を弁^{べん}ず。他人^{たにん}、未^{いま}だ之^{これ}を談^{だん}ぜず、我^わが師^し独^{ひと}り之^{これ}を存^{ぞん}す。又^{また}『愚禿^{ぐとく}鈔^{しやう}』と題^{だい}する選^{せん}有^あり、同^{おな}じく自解^{じげ}の義^ぎを述^のぶる記^きたり。彼の文^{もん}に云^いわく、¹¹「賢者^{けんじや}の信^{しん}を聞^ききて、愚禿^{ぐとく}が心^{しん}を顯^{あらわ}す。賢者^{けんじや}の信^{しん}は、内^{ない}は賢^{けん}にして外^げは愚^ぐなり。愚禿^{ぐとく}が信^{しん}は、内^{ない}は愚^ぐにして外^げは賢^{けん}なり」と¹³云々^{うんぬん}。此^この釈^{しやく}、¹⁴卑謙^{ひけん}の言辭^{ごんじ}を仮^かりて、其^その理^り、翻對^{ほんたい}の意趣^{いしゆ}を存^{ぞん}す。内^{うち}に宏智^{こうち}の徳^{とく}を備^{そな}うと雖^{いえど}も、名^なを碩才道人^{せきさいどうにん}の聞^ききに銜^{てら}わんことを痛^{いた}み、外^{ほか}に只至愚^{ただしぐ}の相^{そう}を現^{げん}じて、身^みを田^{でん}父^ふ野叟^{やそう}の類^{るい}に侔^{ひと}しくせんと欲^{ほつ}す。是^これ則^{すなわ}ち竊^{ひそ}かに末世^{まつせ}凡夫^{ばんぶ}の行狀^{ぎやうじやう}を示^{しめ}し、専^{もつぱ}ら下根^{げこん}往生^{おうじやう}の實^{じつ}機^きを表^{ひやう}する者^{もの}をや。加^{しか}之^{のみ}ならず、或^{ある}いは二教^{にきやう}相望^{そうぼう}して、四十二對^{しじゅうにたい}の異^いを明^あかし、或^{ある}いは二機^{にき}比較^{ひきやう}して、一十八對^{いちじゅうはちたい}の別^{べつ}を顯^{あらわ}す。大底^{おおむね}、兩典^{りやうでん}の巨細^{こさい}、具^{つぎ}に述^のぶべからず。

抑^{そもそ}も、空聖人^{くうしやうにん}（法然^{ほつしやう}）、当教中興^{たうきやうちゆう}の篇^{へん}に由^よりて¹⁶事^{こと}に坐^ざせし刻^{きど}み、鸞聖人^{らんしやうにん}、法匠上足^{ほつしやうじやうそく}の内^{うち}とし

て、同科の故に、¹⁷ 忽ちに上都の幽棲を出でて、遙かに北陸の遠境に配す。然る間、居諸頻りに転じ、涼燠屢しば倏まる。爾の時、僑慢貢高の儔、邪見を翻して、以ちて正見に赴き、憊弱下劣の彙、怯退を悔いて、以て弘誓に¹⁸ 託す。貴賤の帰投遐邇合掌、都鄙の化導首尾満足す。遂に則ち蓬闕勅免の恩、新たに加わりし時、華洛帰歟の運、再び開けし後、九十有回¹⁹ 生涯の終を迎えて、十萬億西涅槃の果を証したまいしより以来、星霜積もりて²⁰ 幾許の²¹ 歳ぞ。年忌月忌、本所報恩の勤、懈ること無く、山川隔たりて数百里、遠国近国、後弟参詣の儀、²² 猶煽なり。是れ併しながら聖人の弘通、冥意に叶うが致す所なり。寧ろ衆生の開悟、根熟の然らしむるに依るに非ずや。

凡そ三段の式文、称揚足りぬと雖も、二世の益物讃嘆、未だ倦まず。是の故に一千言の²³ 褒誉を加えて、重ねて百万端の報謝に擬す。然れば則ち蓮華蔵²⁴ 界の中にして、今の講肆を照見し、檀林宝座の上より、斯の梵筵に影向したまうらん。内証外用、定めて果地の莊嚴を添え、上求下化、宜しく菩提の智断を究めたまうべし。重ねて乞う、仏閣基固くして、遙かに²⁵ 梅怛梨耶の三会に及び、法水流れ遠くして、普く六趣・四生の群萌を潤さん。敬いて白す。

(二四六二)
寛正二年十二月八日奉書寫訖

右筆蓮如 四十七才